

第39期第6回静岡県社会教育委員会

令和7年10月23日（木）

○委員長

ただいまから、第6回静岡県社会教育委員会を開催いたします。

今日の委員会には、教育長が御出席くださっております。諮問に関する審議の途中経過や進捗状況を確認してくださるということで、また、教育長からも様々御意見をいただけるということで、大変ありがとうございます。

それでは、教育長に御挨拶をお願いいたします。

○教育長

皆様には、2年にまたがる議論に集中して取り組んでいただくということで、非常に密度の濃い議論が展開していることを社会教育課からも聞いております。今、教育そのものが大きな曲がり角にあることは皆さん御承知のとおりだと思いますが、社会教育分野も全く例外ではないと私は思っています。従前からの社会教育の守備範囲をただ維持しようと、だんだん、かつてその分野で頑張っていた人たちが高齢化し、数が減って、活動自体が縮減していく時代になってきています。ですので、本当に学校教育の外で社会とつながり、その人の、今風に言うとウェルビーイングを高めていくために、社会教育は「どんな人たちと、どんなふうにこれからつながりを持ったらいいか」を改めて考える、そういうタイミングにいるんだろうなと思っています。

その意味で言うと、例えば今、子どもがこれだけ減っている時代に、不登校の子どもたちが右肩上がりというか、2次曲線のように増えています。では、その子たちと社会とのつながりについて、社会教育は何もしなくていいんだろうか。例えば、そういう問題意識も十分にあり得ると思います。あるいは、独りで住んでいる高齢の方と社会とのつながりにおいて、社会教育という切り口はどのように関わっていけるか。そういう問題の立て方も、これから時代は必要になってくるのかなと思っています。

「つながり」ということが、静岡県の社会教育委員会の非常に重要なキーワードとなっていると理解しておりますので、さらなる議論の展開と深まりを期待しております。どうぞよろしくお願いします。

○委員長

続いて、本日の次第について確認をします。

最初に、事務局から第1回から第5回社会教育委員会と、第2回ワーキンググループについて概要を報告します。

その後、本日の中心となります審議に入ります。

まず、地域で社会教育を担う人材の現状調査結果から分かる社会教育における課題の整理についてです。ここでは、事務局より調査の具体的な結果と、その分析について詳しく説明をしてもらいます。

その後、ワーキンググループから提示された今後の審議の柱に関する提言について、委員の皆様から広く御意見を伺いたいと考えております。この提言内容が今後の審議の基礎となりますので、活発で忌憚ない御意見をいただければと思っております。

次に、委員の皆様御自身の気付きや調査結果から読み取ることができる新たな視点がないかもお伺いしたいと思います。その気付きから新たに生まれた課題についても、今後の審議の柱として取り上げるかどうか、皆様と御相談させていただきたいと考えております。

最後に、今後のスケジュールです。報告書の作成に向けて、いつ、どのような内容について審議を進める必要があるのか、皆様の間で合意形成を図りたいと考えております。

以上が、本日の会議次第となります。本日も、皆様の御協力の下に忌憚のない御意見をいただくと同時に、円滑に会を進行いたしますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、第1回から第5回社会教育委員会と第2回ワーキンググループの概要について、事務局から報告をお願いします。

○事務局

お手元の資料1を御覧ください。

第1回社会教育委員会では、社会教育委員会の役割と諮問内容の説明を受け、社会教育課の取組や第38期報告書内容に基づいた社会教育の現状について理解を深めました。

第2回では、社会教育人材の定義と整理について協議しました。また、人材の現状を把握するために、社会教育人材の現状調査の内容について検討しました。

その後の第1回ワーキンググループでは、第2回の協議を踏まえ、多様な社会教育人材について整理し、3つの役割にまとめました。

第3回では、委員による、小学校における地域学校協働活動の事例発表を通じて、現場の具体的な取組を共有しました。加えて、社会教育人材調査の内容についてさらに詳細な検討を進めました。

第4回では、委員によるPTA活動の事例発表と、委員による静大チャーチセンター等の事

例発表を通じて、多様な視点からの知見を共有しました。加えて、社会教育人材調査について最終的な確認を行いました。

第5回では、社会教育人材の活用の現状を視察するため、静岡市立藁科図書館を見学しました。その後、委員による事例発表を聞き、質疑を通して実践の理解を深めました。最後に、社会教育人材調査の暫定結果について、各委員の所感を出し合いました。

その後の第2回ワーキンググループでは、社会教育人材調査の結果を資料4の形にまとめ、これを分析しました。資料4については、また後ほど御説明いたします。

その前に、お手元の資料2を御覧ください。

資料2の裏面の中段、「社会教育人材調査結果の分析から」より下に、概要を示しました。今回の調査結果は社会教育活動に携わる関係者による認識や課題意識と概ね一致しており、特段の乖離が認められない。社会教育人材に対する期待や役割がつくることに集中しており、広げる、支えるという多様な役割の必要性がまだ十分に理解されていない。社会教育人材の捉えとして、これまで検討を重ねてきた3つの役割が重要であることが本調査によって裏づけられた。つくる、広げる、支えるという社会教育人材の多様な役割を明確にし、この考え方を丁寧に人材に伝えていく必要がある。以上のような議論がされました。詳しい分析内容につきましては、この後の審議の（1）の内容と重なる部分が多いため、ここでは割愛させていただきます。

結論として、「学びの場をつくる人材がほかの人材とつながって、広げる、支える役割を分担、協働していくことが、地域の社会教育を前に進める鍵となる」と考えました。そして、調査結果に基づき、諮問に向け、後述する5つの内容を審議の柱として提言しました。

以上が、これまでの審議の経過です。

○委員長

第1回から約1年経過したので、全部振り返ってみたわけですが、この内容でよろしいでしょうか。

そうしましたら、今日は審議していただきたいことにも絡んだ報告でした。ワーキングでも、今日、審議していただきたいような部分をまとめてありますので、そちらに移って、早速審議に入りたいと思います。

それでは審議（1）地域で社会教育を担う人材の現状調査結果から分かる社会教育における課題の整理について入りたいと思います。

それでは、事務局から調査結果の説明をお願いします。

○事務局

お手元の資料3、4、5を使いながら説明いたします。

調査結果の分析については、資料3の中から、第2回ワーキンググループで主に検討した部分を中心説明いたします。

まず、資料4と資料5を御覧ください。

資料4の2、3ページは、4から9ページの社会教育人材のスキルと意欲、態度について、3つの役割ごとに現状を聞いた結果をクロス集計したものです。尺度どおり16分割したものと、否定群と肯定群で4分割したものがあります。色の濃い部分にたくさん人がいることが分かります。

回答全体から、1 社会教育を担う人材が十分であるとは感じられていない。2 否定的な回答の合計が肯定的回答を大幅に上回っている。この傾向は、特に学びを広げる人材に関する設問と学びを支える人材に関する設問で顕著である。3 つくる人材については、社会教育委員は一定数いると認知していることが分かりました。これは、つくる人材に比べて、広げる人材や支える人材の活動の成果が見えにくい、このことが肯定的認知の低い一因だと考えられます。

その結果、これらの役割が社会教育人材として適切に評価、認知されていない可能性があると分析しています。

これを受け、資料5の審議の柱（1）学びをつくる人材だけでなく、広げる人材、支える人材を不可欠な人材として捉え直し、その活動を見える化する方策を提言いたします。

続いて、人材の意欲とスキルを分析したところ、全体の傾向として、意欲はあるが、それを実行に移すためのスキルが不足していると認識していることが分かりました。この結果から、特に具体的なスキルを見える化し、強化していくことが人材の育成策として求められます。

これを受け、審議の柱（2）新たな社会教育人材の育成・発掘に向け、意欲やスキルの中で重点的に強化すべき側面と能力を高める方策を提言いたします。

次に19から21ページ、自由記述とのつながりから見えてきた課題です。自由記述からは、少数の献身的な方が複数の役割を兼任せざるを得ない状況が明らかになってきました。この状況は一つ一つの役割における専門性の育成を妨げ、結果的にその方への過度な負担につながっています。さらに各活動や組織が独立して存在し、それらを横断的に連携させるつなぐ人、つなぎ役が不在であるという指摘が複数見られました。このつなぎ役の不在が、活動間の横のつながりの欠如の最大の原因であると考えられます。

これと、本委員会でもこれまで指摘してきたつなぎ役の重要性から、審議の柱（3）1人が複数の役割を担う現状を改め、各人材の得意分野を生かした役割分担と横のつながりを強化する方策を

提言いたします。

最後に、活動の実態と目指す社会像のギャップについてです。10から17ページは社会教育における人材以外の側面について、その現状を聞いた結果を表しています。

18ページは、社会教育を通して実現したい地域社会像を3つ選んでもらった結果です。

この2つを対比させまして、現実と理想のギャップを明らかにしました。理想の社会像として、学校や企業、行政など様々な組織が協力して活動が行われている地域、これが最も多く挙げられました。しかし、現状の企業との連携については、81%が否定的な回答をしており、これは調査項目の中で最も大きな乖離の1つです。多様な主体と連携を求める強い願望に対し、特に企業という外部リソースの活用が進んでいないことが明らかになりました。

また、団体同士の情報共有や連携を図るためのプラットフォーム、活動拠点の必要性を訴える声が目立ち、活動情報を一元化する仕組みの構築が行政に期待されています。

これらを踏まえまして、審議の柱（4）多様な主体の連携の中でも特に企業との連携を強化する方策を、また、（5）活動情報を一元化し、交流やスキルマッチングを促進するデジタルプラットフォーム構築の可能性を提言いたします。

以上が、今後につながる主要な分析結果の説明です。

○委員長

以上が、ワーキングで調査結果を見て、諮問題に対してどういう提言をしていくかという観点から、この分析結果をまとめた結果です。さらにこの後1年間、皆様に御意見をいただいて、提言として形にしていきたいポイントとなっています。

調査結果の見方は様々あるので、気付きはもっと出てくるかとは思うのですが、次の提言に向けてと、諮問題と照らし合わせて、この5つをまず提案させていただきました。

ぎゅっと絞ったことになっているので、皆様から御意見、御質問はありますでしょうか。この後、こちらで提案した審議の柱については、もうちょっと丁寧にもんでいこうと思いますので、今の調査結果の見方等について、質問等あればいただければと思いますが、いかがでしょうか。

今から、資料5に考え方を図示したものと、今後、こういうところを検討し、この役割分担の横のつながりの強化を中心として点検していきたい方向性について、皆様にそれでよいか、お諮りしたいと思います。ここでの審議の柱に沿って、御意見をいただきたいと思います。

まず、（1）学びをつくる人材だけでなく、学びを広げる人材や学びを支える人材を社会教育に不可欠な人材として捉え直し、その活動を見る化する方策を考えていきたいと思いますが、いか

がでしょうか。

この委員会の前半、最初の頃に、社会教育人材をどう捉えるかといったときに、この3つの人材があるのではないかということで、そこを仮説として、現状どうなのかと見たところが、この結果になってくるわけです。つくる人材はいるかなという感じだけれど、広げる、支えるとなると、恐らくそういう発想がないというか、観点もあまり気にされてない状況もあるのかなと私は結果を見て思いました。

まずは、人材といったらただつくる人だけでなく、広げていく、支えていく方たちも人材と捉え、活動の仲間に、主体的に入っていただけるようなことを考えるべきかと思いました。ある意味、私たちが考えてることについては、まだまだ一般の皆さんに理解していただけでないのかな。ただ、それは皆さんに知っていただきたいことなので、広げていく、その方策までちゃんと提示する必要あるかと思っています。

○委員

今の「学びをつくる人材」については、比較的に恵まれているというか、その存在が認識されています。一方で、「広げる」「支える」という役割の人材については、あまり認識されていない部分があります。ちょうど私たちがPTAの協議会活動等をやっておりますと、現実にはこういうことかなと感じる部分がありましたので、話のきっかけに思いを伝えさせていただければと思います。

まさに資料2の裏にある通りです。「仕掛けを考えて巻き込む力がある人」や「学びをつくる人」が学びを進めていくためには、そこに巻き込まれてくれる「フォロワーシップ」をもっている人たちの存在も必要です。その両者が共に歩むことによって、社会教育的な活動が前に進んでいくという話も、以前皆様としたことがあると思います。

例えば、社会教育士や地域のコーディネーターといった「つくる」役割の人が、様々なことを考えて「こういうふうにやっていきましょう」と提案したとします。その時に、学校の先生方や地域の協力者といった「広げる・支える」人たちが、「いいね、一緒にやりましょう」とついてきてくられることが必要だと思うんです。

しかし、意外と最近は、学校でいうと働き方改革であるとか、地域の方の高齢化であるとか、「なかなか人が集まらないから仕方がないよね」って、ちょっと二の足を踏んでしまうような構図が非常に身近に多くございます。まさに「つくる人」が頑張りたいと思っていても、「広げる人」と「支える人」の協力が得られないために、届けたい人に学びが届かない、あるいはつながりたい人とつながっていない、ということが現状かなと思います。

ですので、2番の「広げる人材」、3番の「支える人材」に、どういうふうに自覚してもらうのか。先日もPTA等の活動をする中で感じたのですが、各学校の先生たちも忙しいので、「講座のお便りとかをいっぱい出したら失礼かもしれない」と遠慮がありました。あるいは、例えば保護者が「PTAを解散したい」と言ったときに、意外とあっさり解散してしまうんです。「先生、そんなにすんなり受け入れてしまうの。少しごらい引き止めてもいいんじゃないの」と思うこともあります。5年後、10年後の地域のことを考えたとき、今の人人が続けるのが大変だからといってあっさり認めてしまって、これから入学してくる保護者の方たちが「うちの学校、PTAないんですか。じゃあどうやって協力すればいいんですか」となってしまう。その時の勢いで負担が軽いほうに転んでしまうと、後の人たちの居場所がなくなってしまう。そんな変な現象も起り始めています。「忙しい」、「巻き込むのが大変」という現状は分かるけれど、そこをどうやって乗り越えていくのか。その意欲であるとか、スキルであるとか、そういうことを含めて、2番、3番の人たちを底上げしていく必要性を、現場としては非常に感じています。

今回の提言の方向性は、私自身、身にしみて重要だと感じており、良い提言に向かっていくといいなと感じているところです。

○委員

今、お話があったうちの1点目、そして2点目にも関係する話かなと思います。

市町名は控えますが、たまたまある社会教育委員とお話しする機会がありまして、こういう話を聞きました。その方の委員会では、「次、何をしようか」という時に、毎回「どこに行ったら社会教育に携わってくれる人がいるだろうか」「どうやって人を発掘し、つくり、確保するか」という話ばかりしているのだそうです。そこでその方は、「それではいけないから、違うテーマで、もう少し若い人も関心を持つようなテーマで話をしたらどうか」と提案をしたのだそうです。しかし、一応意見は聞いてくれるもの、「いつもどおりのテーマにしましょう」という感じで流されてしまい、結局毎回ルーティンのように話が進んでしまうということでした。自分はかなりやる気があって色々したいのに、何か提言しても、「まずは今までやってたことをやりましょう」「やっていないことはやめましょう」みたいな雰囲気がある。結局、毎年同じような話をして、「人がいないよね」で終わってしまう。「もう少し違う話はできないだろうかと言っても、なかなか受け入れてもらえない」と嘆いておられました。

お話を聞いて、「なるほど」と思いました。それでは逆に、せっかくやる気がある人が自分の仲間を増やそうとしても、なかなか増えないのではないか。要するに、「人をどうやって集める

か」という話をするを中心にするあまりに、かえって人を集められなくなっていく。そういう現状があるのでないかと感じました。ですから、これから議論にどういう形で関わるのか、はつきり言うと私もイメージができないところもあるのですが、「どういった人を探すか」も確かに大事ですけど、「どういった環境を設定すれば人は集まるのか」という視点が必要ではないでしょうか。

年齢層が高い方は、比較的もともと関心が高い方が多いので、むしろ若い方で関心を持っている方、あるいは子育てがある程度落ち着いて「もう少し自分で色々やってみたい」と考えている方に、幅を広げていくための「環境設定」というか「テーマ設定」が必要ではないでしょうか。「どういった人を探すか」ではなく、「人が集まるためにはどういった環境が大事なのか」。そういう視点を考えてみる必要があるのでないかなと思った次第です。

1と2に関わって、しかもざっくりした話になってしまふところですが、知人から聞いた話をもとにして考えたところです。

○委員長

今、(2)にも入ったので、新たな社会教育人材の育成・発掘に向け、3つの人材の意欲やスキルのうち、重点的に強化すべき側面と能力を高める方策で、3つをただ並列的にやるわけではなく、強化すべきところはどこかも含めての確認になるわけですが。

どちらにせよ、人材をどう捉え、どういう方々で活動していただかにになるわけですが、今、委員からは、人がこうでなければならない、こうであるようにというだけではなくて、環境を設定する必要性をおっしゃっていましたが、いかがでしょうか。

○委員

言葉尻の問題かもしれないんですけど、学びの場を支える。これが、どうもちょっと私、しっくりこなくて。私がふだん活動している中だと、学びの場を支えようと思って来ているのではなくて、学びに参画している人材が、いつの間にか場を支える人になっているイメージがすごく強いです。結果的に支えてるので、支える人材でもいいかと思うんですけど、来てる人からすると、別に支えようと思って来てるわけじゃない。やはり参画しようとか、興味があるからとか、楽しいからと言って来てくれている人がいつの間にか支える人になってるので、私的には、学びに参画する人材のほうがすごくしっくりくるんですが、皆さん、いかがでしょうか。

結果的に支える人なので、支えるでもいいんですけど。すみません、個人的な意見なんんですけど。

○委員長

社会教育の活動が学び合い、支え合うだから、固定じゃないんですよね。「私、支えに来ました」と言う人はあまりいなくて、一緒に学んでいたら、それが誰かの学びの支えになっていたみたいのが、一番理想の形がそこにあります。

○委員

委員のお話を聞いていて、高校生も地域の学びの場に参画させていただく中で支える人材になっていく、まさにそのとおりだと感じました。

地域にはいろんな催物や学び場があって、実は生徒たちの中にはそれをキャッチして、足しげく通って、地域を支える人材になり得ている者も、個別に話をしてみると意外といいます。例えば本校の生徒で、地域のお祭りに楽しんで参加するよりも、お祭りの運営を支える側になっている生徒が意外と多くいて、コロナ以降、地域の様々な行事が衰退していくという話を聞く中で、地域を支える人材として育っていることを嬉しく、また心強いと思います。一方で、多くの生徒はなかなかそういう情報をキャッチできずに、学校生活や部活動等に忙殺されているような状況なのです。以前にも発言をしましたが、高校生にも参加できるように情報が見える化できるといいなと考えます。

まとめますと、支える人材になり得るには、参画することはまさにそのとおりなので、「参画し、支える」という言葉を付け加えてもいいのかなと思いますが、まとめの中で支える人材は参画してからであるのであれば、そのままでもいいと思います。

いずれにしても、高校生は支える人材として、これからも地域の活動や様々な場所で活躍させたいと思っております。

○委員

義務教育の立場から、お話をさせていただきます。

先日、社会教育の委員の方が、本校に、こどもたちにパソコン教室をやるよとビラを持ってきてくださいました。こどもたちが30人ぐらい参加をしたんですが、ビラが参りましたら、こどもたちに大々的に宣伝します。できれば参加してねと広報するんですけど、その活動がどうだったかというのを、送り出すだけで、学校には見えてこなくて。「こんな活動したよ。楽しかったよ」と伝わるものがある、ある意味、一番の見える化なのかなと感じていますので、何かホームページとかで発信ができればいいなと思っています。

併せて、先週、地域のお祭りがありました。そこにたくさんの高校生や中学生が参加し、もちろん小学生も楽しむ立場としていたんですけど。その中で、小学校のときに楽しかったから、今度はボランティアで参加したよと言う子どもたちがいました。そういう活動をする子たちは、これから社会教育とかを支えていく立場になってくれるのではないのかなと思っています。

初めの話に戻りますが、パソコン教室を担当した社会教育委員さんは、本校で子どもの頃、児童会の役員をやっていて、いろんな活動の企画をしていた子どもでした。やはり児童会、中学の生徒会、高校の生徒会などで企画運営の喜び、楽しさを知った子どもたちが、社会教育の人材の種としてなるんじゃないかなと思っています。

○委員

今、皆さんのお話を伺っていて、私も思ったことをお話しさせてもらいます。図書館で、結構、ボランティア活動してくださっている皆さんのが高齢化、メンバーの固定化がすごく課題だというのは、色々なグループの方から言われるんです。よく皆さんにおっしゃるのが、「ボランティアで音読をしているよ」「お話し会を地域でやってるよ」なんて言うと、すごく立派なことをやっていて、「私にはとてもできない。すごいわね」みたいな反応だと。

そうじゃなくて、楽しいからやってるんだよ。すごく立派なことやってるつもりはないよみたいに言うんだけど、なかなかお友達に、「あなたも参加してみない」と言っても、そういう反応が返ってくると聞いたことがあります。

もう少しハードルを低く、先ほど学びの場も支えるよりは、面白いと思うから一緒に参加していく、参加していくうちにどんどん楽しくなってきて、私も少し手伝ってみようかみたいにして人が広がっていくのが、やっぱりベストなんだろうなと思いました。

先ほど、委員が、高校生の方は学校でも部活でも忙しいという話だったんですが、最近、部活を学校でやらなくて、地域でやつたらどうかというお話もあるので。中学生、高校生がその年代の子たちだけでやるような競技もあるのでしょうか、年齢は関係なく、社会人の方もみんなで一緒にやれるような部活、クラブ活動みたいなものもあると思います。そういうのが、無理に学校の中で特定の年代の子たちだけが集まってやらなくても、地域の皆さんと活動していくうちに、それが社会教育になっていくのかもしれないと思いました。

○委員長

今、委員から話があったことは、（3）にもつながってくるなと思ったんですけど、特定の人に

固まっちゃってというところが、（3）でも要約したことになるかなと思います。

教育長、（3）に絡んで御意見いただけますでしょうか。

○教育長

皆さんの御意見を伺いながら色々と考えまして、（3）の議論に切り込む前に、アンケートの自由記述を拝見して感じたことをお話しします。そこに書かれていたコメントと、私の問題意識が非常に重なると感じましたので、まずはその点から触れさせてください。

19ページの真ん中辺りに、「高齢化」「固定化」「マンネリ化」、あるいは「人口減」「子育て現役世代が少ない」といった言葉があります。「今までと同じやり方では立ち行かない」「方向転換が必要だ」「前例踏襲をやめるべきだ」。全くその通りです。

私は、今までのような社会教育活動の枠組みをそのまま続けていくと、恐らくこの分野は「消滅」すると思っています。どんどん公民館に人が来なくなっていて、かつての青年団のような活動もなくなっていく。これは時代の流れの中で、あらがいようのない大きなトレンドだろうと認識しています。

では、社会教育が本来担うべき「役割」までなくなったのかというと、それは全然違います。これだけ変化の激しい時代に、学校を出た後、あるいは学校とは違う場所でどうやって学びの機会を得て、自分なりの課題意識や、人とのつながりを持って生きていくか。ここに社会教育がどうコミットしていくかが、今、問われているのだと思います。

ですから、旧来型の社会教育の担い手が減ったからといって、「どうやってリクルートしようか」と人を集めようとしても、正直、リクルートしようがない。私の立場でこんなことを言つてはいけないのかもしれません、現状はそうです。 そうではなくて、先ほど申し上げたような「これからニーズ」に対して、どんなふうにつながっていく人を仲間に入れていくか、という視点が重要だと思うんです。

社会教育士や、これまでの社会教育のアプローチだけで、全ての人と直接つながるのは難しい。恐らく、従来の方法では、既存の活動のリーチの範囲でしかつながれません。

例えば、不登校のこどもたちとどうつながるか。社会教育士が直接行ってつながるのは難しいと思います。 ただ、彼らが通っているフリースクールであるとか、校内・校外の教育支援センターなどは既にあります。 そういった「既にこどもたちとつながっている場所」と、社会教育の従来の担い手が手を取り合う。そういうやり方は十分考えられます。

また、例えば、外国につながりを持つこどもたち。日本の社会との接点がないまま大きくなり、

学校制度にもフィットしないこどもたちがいます。これも、従来型の社会教育士がその子たちとダイレクトにつながるのは困難です。じゃあどうするか。当事者の組織があったり、支援しているNPOがあったりします。そういう人たちと連携することで、例えば、外国語の絵本がたくさんある公立図書館へNPOと一緒にツアーをやってみる。それも一つのアイデアです。

このように、社会教育の担い手が「万能」で、全部をやる時代ではなくなってくるのだと思います。ニーズのある人たちと「既につながっている人たち」をどうやってつなげていくか。そうすることで活動が新たに生まれ、広がり、深まっていく。そうすれば、家の中で社会と接点を持てずにいる人たちも、「やってみて、行ってみて楽しかった」という気付きを得られ、そこから日本の社会との接点が広がっていく。そんな展開もできるのではないかと考えております。

冒頭の話は若干観念的になりましたので、2つほど具体的な事例を出して、お話しさせていただきました。

今、私の申し上げたことは、間接的にこれまでの議論に対する私の考え方につながり、ひいては（3）に対する視点へとつながっていくものと考えております。

また、皆さんの話を伺いながら思っていたのですが、高校生たちが頑張っている例や、児童会・生徒会の中で企画経験を積んだ子たちが、長じて後に活躍するという話がありました。そう考えると、学校教育の中で、地域と関わるような経験を積むことは非常に大事だと思っています。そして、それは今、「探究活動」がまさしく担っている部分だと認識しています。探究活動は地域探究のみに限りませんが、地域と深く関わっていく探究こそ、まさにそういうチャンネルが学校教育の中に組み込まれているのだと思います。

例えば、部活動の地域展開のような形で、こどもたちが様々な年代の人とつながるような部活もあると良いでしょう。また、探究活動でこどもたちが地域の活動をしている人たちとつながるようなチャンネルを広く持っていくことは、社会教育の持続可能性を考えていく上では、将来の担い手の「弾込め」になっていくのかなと思っています。

○委員長

皆さん、いかがでしょうか。今の教育長の御意見も含めて、何かありましたらお願いします。

先ほど委員がおっしゃっていたように、「こういうことやってるんだよ」と言うと、「ああ、御立派で」みたいな反応がある。つまり、それぞれの人の中に、「こういうことをする人はこんなふうだろう」という固定概念みたいなものができてしまっているんだと思うんです。例えば、「青年団をやっている」とか何とかと言うと、もう別世界の人と見られがちです。そうじゃなくて、「でき

ることで参加しようよ、支えようよ」という以前に、「まず参加してみようよ」と誘うこと。それが、教育長がおっしゃるようなところに繋がってくるのかなと私は思っています。人口減少の中で、どんな活動も「こういう人でなきややれない」という考え方を捨てる。そして、できることでみんながつながって協力し、やれることをもっとつくっていく。そういうつながり方、活動のつくり方こそ、これからは重要だとすごく考えています。

さらに、委員の話を聞いていて、自分の息子のことを思い出しました。委員も言っていた、お祭りの話です。うちの子は最初、お祭りが大好きで参加していました。ただ大好きだから、地域のお兄さんたちから太鼓と笛のやり方を教わって、すごい熱中して出かけていったんです。今、20代後半になったので、今度は知らない間に「支える側」になっていて。頭の構造も支える側の意識に変わっていて、「これから祭りはこうでなきやいけない」みたいなことを語り出します。「子どもたちもたくさん来てくれるようになったようだ」とか、ちょっと今まで子どもとして参加していたことを思い出したりして。

それで、委員の話を聞いたら、そうだ、うちの子が支える側になったきっかけは、最初、面白くて参加したところから始まったよな、と改めて思ったんです。そういう気軽さというんでどうか、敷居をつくらないで、「できるところで、まず参加してね」という姿勢。そういうのが大事なのかなと、様々思いました。

○委員

今、皆さんのお話を伺いながら、自分の活動と重ね合わせるように幾つか思い出したことがあります。私は情報モラルの啓発活動として、スマホ講座や、最近では乳幼児の保護者向けの講座を各地でやらせていただいています。

高校生のお話から思い出したのですが、高校生はデジタルのスキルに関して、私の世代より遥かに先を行っています。今さら依存だとか誹謗中傷の話で注意されなくても、言われることは十分分かっている世代なんです。ですので、私が最近高校生に向かって言うのは、「受講する側のそっち側にいないで、皆さん、こっち側に来てよ」ということです。普及する側、啓発する側になってほしい。例えば、まずは家族でいいし、困っている人がいたら、スマホの使い方を周りに伝えるのと同時に、「こういうとこにも気をつけなきやいけないよ」と一言添えるだけで広がっていく。先生の話を聞くだけではなく、「伝える側」に回らないといけないんです。

確かにどの分野においても、今、高齢化が進んでいます。私たちの活動も20年以前からやっているので、高齢化しています。だからこそ、若い力が欲しい。学ぶよりも教える側に行ったほう

が、断然その子にとっての学びになるのも分かっています。ぜひ伝える側になってくれと言っています。

ですけど、いざ「伝える側になろう」といったところで、どこからアクションを起こしていいか分からぬだろうな、と思うんです。その1つの形として、県でやっている「スマホルールアドバイザー養成講座」の研修があります。チラシ1枚配るだけでいいし、一言伝えるだけでも、それで社会活動としての学びに参画し、広げることにもなる。探してみると、高校生でも活躍できる種は意外とあるのかなと思っています。

あと、教育長のお話から探究の話が出ました。夏休みに、探究のテーマにネット依存やネット利用について深掘りしたいという高校生が来まして、インタビューに答えたこともあります。やはり、深く考えて、自分たちがまとめて発表した先に「広げていきたい」という思いは、高校生でも持つてゐる子が必ずいるなと思って、非常に心強く思いました。

話が戻るのですが、「スマホのある子育てを考えよう」の活動をしていると、その後の裾野の広がりに確かにつながるのが、PTA連絡協議会の研修会です。市立幼稚園や小中の連絡協議会だと、役員さんなどが動員として集められるのだと想うのですけれど、形としては従来の形で若干古いのかもしれない。でも、やっぱり来て、講演の中で必ずグループワークをやるので、話を聞くだけじゃなくて、自分がスマホのある時代にどうやって子育てしようという思いを語り合うと、その人たちの中に残るものがあって、自分たちのフィールドに戻った先で、「こんな話を聞いたよ」「こういうルールつくるといいよ」というのが広がっていく実感があります。

確かにそれだけだと古くて、従来の形だけに頼り切りだと消滅するかもしれない。でも、従来のパターンも生かしつつ、新しいパターンが見つかるといいなど、本当にそれは熱望するところです。

そして、その新しいパターンが、一気に（5）につながると思っています。「デジタルプラットフォーム構築の可能性」という言葉で柱の5つ目がありますけど、そこら辺をどう取り入れていいか。今は、情報発信でデジタルを使おうとか、コアのメンバーの連絡ツールとして使うぐらいで、そこから先の発展性の可能性が、今、行き詰っている感じがします。ここが一歩進んでいくと、また新しいパターンの可能性が見えてくるかなと思いました。

○委員長

今の（5）もコメント、でも（5）は皆さんが出してくださいってのが、集約的に出てるのかなという部分もあるかなと思います。時間のこともありますので、（4）（5）も含めてコメントいただければと思いますが、いかがでしょうか。

○委員

企業との連携という話で、「企業をいかに巻き込むか」という議論にしてしまうと、企業を対岸の存在として引っ張ってくるような議論になってしまいます。

しかし、企業側のスタンスはこの数年で随分変わったなと思います。以前はC S Rという取組で、収益だけでなく社会的な利益を還元しようというものでした。それがさらに、今では地方との共創や創生といったところに、より積極的に関わっていくようになっています。あるいは、会社というよりも、各社員がライフワーク的な活動をする方も増えてきています。それを見ている学生たちが、それを1つの憧れと見ているような変化もあります。

例えは静岡市内では、ファクハク（工場博覧会）のように工場を持つ会社さんが工場を一般開放し、そこで地域とつながっていく活動をし始めています。学生や高校生も、手伝いに加わり、若い人たちがある種、自発的につながろうとしている姿があります。

まず考え方としては、企業をいかに巻き込むか、企業は関心がないんだという前提ではなく、企業は変わろうとしているという前提に立つべきです。要は、そこの共通目的になるようなものがお互いにあれば、企業も喜んで参加するんだろうなと感じています。

もう一つ、(1)、(2)、(3)の人材（広げる、支える、参画する）に関わる点です。

この言葉の定義は、しばらく議論しながら、ここにいらっしゃる皆さん「この言葉だよね」と納得できるものを模索していきたいと思っています。そのためにも、それぞれの人材の行動や感情を「見える化」していくべきだと考えています。

私にとって分かりやすかったのは、渡邊委員が最初におっしゃっていたように、「ああ、いいですね、一緒にやりましょうよ」と言う人がいると、流れが変わるということ。これが、広げる人材の一つのパターンです。

また、宮下委員からもあったように、「これやろう」と言っても否定的な声が出たときに、「ああ、それ、やってみましょうよ」とたった一人でも言うと流れが変わっていくんです。まさに、そういう具体的な言葉を定義することで、「ああ、こういう行動をする人が、こういう人材なんだね」というのが分かると思います。

そして、支えるとか参画するといった際に出てくる「楽しかった」という言葉は、きっとまた「つくる人」を支える力になってくれます。そうした言葉も「見える化」することで、「こういう人たちがつながりのきっかけなんだね」ということが、より明瞭になるのではないかと感じました。

○委員

私、社会教育委員が随分長かったものですから、社会教育委員の立場からお話をさせていただきます。

まず、5つの柱の中で関係してくるのが、3番の「一人が複数の役割を担う現状」です。私たち社会教育委員は、これまで、まちの社会教育課の担当者さんと一緒に、「どういう形で学びをつくるか」という点に重点的に取り組んできました。その上で、一つの事業を計画どおりに進めるために、どうやって人を集め、どう進めるかというところも、ほとんど社会教育委員の枠の中で解決しようとしてきたのが実情です。

今回の提言では、そうではなく、「つくる人」「広げる人」「支える人」の役割を分散化し、皆さんで協力してつなげてやっていきましょうという方向性になっています。教育長もおっしゃったように、これから社会教育には、枠を超えた「横のつながり」がすごく大事だと常日頃から感じています。しかし、「じゃあ、横のつながりをどうしていこうか」というところの答えがなかなか出なくて、私自身、一人で暗中模索し、苦しんでいた部分もあったのです。

狭い枠の中で考えるよりも、例えば「社会教育でこれをしたい」というときに、手伝ってくれる人や一緒にやってくれる人が周りにいるのは確かです。ですが、そういうネットワークがなかなかなくて。「じゃあ、誰に声をかけたらいいのかな」というところで、ちょっと悩んでいるところもあります。

こうしたネットワークの課題を解決できれば、社会教育の輪はさらに広がります。具体的に、そんなに悩まなくても、うまく社会教育活動ができていくのではないかと思った次第でございます。

○委員長

今、委員がおっしゃった、誰に声をかけたらよいかについてですが、先程教育長が、もともと活動している団体のニーズを拾つてくると、例えば日本語の本を図書館で持つてるとなれば、そこがつながれば、また新しい活動になっていくわけですよね。

○教育長

さきほどの私の話に補足したい点があります。

社会教育委員の立場として「つながりたい」という意向があつても、一方で、例えば外国ルーツの子をサポートするN P O側も「この子たちに日本の社会と接点を持ってほしい」という思いがあつても、お互いの存在が分かっていません。どうするかというと、その間にいる「ミッシングリンク

ク（繋がりの欠落）」とつながることです。例えば国際交流協会です。国際交流協会に入ってもらい、そこを通じて繋がっていく。県にもありますし、多くの大きな市町にも存在します。

浜松で言えば、フィリピノナガイサというグループや外国人学校があります。国際交流協会が「そういうところとちょっとお話ししてみますか」とワンクッション入れてつなげてくれるわけです。いきなり社会教育委員がフィリピノナガイサの方に電話をかけるのは、かなりハードルが高い。つなぎのところとうまくつながることが、非常に大事なんです。

例えば不登校の場合であれば、今、静岡県ではフリースクールや教育支援センターの関係者が集まる連携協議会がつくられており、義務教育課が主導しています。義務教育課とつながり、その連携協議会から意向を聞いていく。つまり、両方が知っている第三者のつなぎ役的な機関にうまくつながっていくという構図です。

恐らく、こうしたミッシングリンクを見つけ出すことを、社会教育委員個々に求めるのは難しいでしょう。まさに県教委の社会教育課や市町の社会教育課といった行政が、その情報を持つべきです。社会教育の理念に照らしたときに、新たに関わってほしい人たちと、「どこの機関を介せばつながれるか」という情報を、行政が把握しているはずです。そういったところをうまくつなげていくのが行政の仕事です。社会教育の行政を担う人たちが、これからトレンドをちゃんと勉強しないといけない。

新たなターゲットとつながっている「ゲートキーパー」となり得る団体、例えば国際交流協会や不登校の連携協議会にどのような団体があるかということを、行政機関、特に社会教育課がしっかりと調べて、つなげていくところが必要なのです。

実際につながっていくのは、あくまで社会教育活動の担い手である当事者と、新たなニーズを抱えている人たち自身です。ですが、その「つなぎ」をうまくサポートする役割こそが、行政の仕事なのだと思って聞いていました。

○委員

最初の学びの場をつくる、学びの場を広げる、学びの場を支えるという図についてですが、一方方向に見える図ではなく、それぞれが相互に関係しあう図の方がよいのではと思います。

○委員長

相互関係がもっとある感じですね。

○委員

循環しているような図にしてどうでしょうか。これまで委員会で考えてきたことと合っているかと思います。

○委員長

包含するとかですか。

○委員

はい、そのような感じでしょうか。

また、活動母体などは見える化する必要はあるかと思いますが、活動している人を見せる必要はない場合もあるので、そのあたりの配慮は必要かと思います。

これまで、委員の皆様がおっしゃる横のつながりは、とても大切だと個人的にも感じております。もちろん、県や市町の社会教育課が「つなげる」役割を担うこともあるかと思いますが、先日受けた研修では、社会教育主事や社会教育士のネットワークが出来るとお聞きしました。まさに、社会教育人材そのものでありますので、そうした方のお力を借り、企業やNPOなどと繋がって、そこに行政も加わっていけば、様々な機関と繋がっていけるのかと思います。

○委員

私は、企業との連携について、実際、企業は社会とつながりたがっていると思います。なぜなら、人手不足、人材不足。地元から人材を採用したい。そのためには地元に存在をアピールしたい。この前、長沼にバンダイのプラモデル工場が新しくできましたけど、そのときにも担当者の方が挨拶の中で、隣に科学技術高校もありますから、ぜひ科学技術高校と連携して、将来の企業を支えるというか、プラモデルの地方を支える人材を育てたいと言ってたように、企業と社会教育関係者が出会う仕掛けをつくらなきや、どちらから声をかけるかというと、当然、社会教育施設というか、社会教育から声をかけないと、企業もあまり「我が社と、我が社と」は言いにくいところがある。そういうことで、つながり方のアップデートというか、そういうものが大切だと思います。

ですから、(4)、ここを強化するところは強調していくべきだと考えます。

○委員

委員が、どういった環境を設定すれば人は集まるかとか、委員から企業もつながりたがってるん

だよというところで、身近でそういった場面に出くわしてたんです。

1つは、地域で偶然やってたビアガーデン。私はそういった場が好きなので行ったら、そこでつながった人同士が、あれが面白そうだよね、これが面白そうだよね、こんなことやりたい、あんなことやりたいねというのに私も巻き込まれて、「こんなことやりたいんだけどさ」に対して「いいんじゃない、やつたらいいと思うよ。応援するよ」と言って、実際、動き出してたとか。

あと、お酒屋さんでやってる角打ちがあって。そこも楽しい場なので、色々な人が来るので、私、よく顔出します。そこで、私が地域の学校において、地域学校協働本部事業で活動していると知った人が、うちの企業だったら、こういうことやってあげられるよと声かけてくださるんです。

実際、2月にうちの校区の子たちとか地域の人たちを招いて、キッザニアみたいな、ミナミッザニアをやろうと企画しています。新たに、そんな話をしていたら、企業さんが、「うちこんなことができるよ」ということがありました。結構、お酒の力は大きいなと思う場面がこの数か月あります。

色々なところに行くと、色々な人が色々なことをやりたがっており、つながるといい化学反応が起きるんだなという場面にすごく出くわしてたので、楽しい場にはみんな行くし、楽しい話をすると、みんな乗っかかるくるんだなと思ったことを皆さんと共有したかったです。

○委員

大上段に社会教育委員会を開きますとか、そういった形で人を集めようすると、どこか形式というか、そういったことになるのではないかと思います。まさに、今、ビアガーデンなど、地元の様々な場面で、色々な話をしていく中で、そこから輪が広がっていくようなお話をありました。

私たち、何かをしようとするときには、イベントごとというか、何か場を設けなければならないとついつい思いがちですけれども、むしろ設定されている場に入っていく、地域の場に入っていくことがかなり大事なのではないかと感じました。そういう中で、話をさせてもらう機会をもつことが重要です。ビアガーデンなどであれば、自然に話が弾むでしょうけれども、地域の会合等があれば、そこで話をさせてもらう機会を設けてもらう。あるいは意見を聞く機会をつくってみる。そうすると、自分の意見が発言できる機会が設けられていくことによって、人は関心を持って、こうしたい、ああしたい、じゃあ、今度はここにおいでよ、というような話につながっていきやすいのではないかと思います。

そういう意味では、今のお話を聞いていて、むしろ、先ほど環境を設定するというようなことを申し上げましたけれども、設定するのではなく、既存の環境に入っていくという1つの方法なのか

など感じたところです。

○委員長

今、お酒の場が出ましたけど、少しずれてるかもしれないけれど、イギリスの社会教育の発祥はコーヒーハウスというか、成人教育です。ざくばらんなどころで色々な談義というか、討論というか、そういうのが教養を深めたり、新たな知見を生んだりということがあるわけなので、形式張ったとか、こうでなくちゃではなくて、あらゆるところを捉えて、何かをつくり出していくという社会教育の原点というか、そういうものをもう一回やってみるのが必要なのかなと思います。

あと、アイデアって、よくアイデアを出さなきゃと言うとなくして、お風呂とかトイレ、そういう場でちょっと発想を崩すと、それは人間の回路の関係で出ると言います。だから、これでこうしましようではなく、こうでなきゃならないと言ってしまうのではなくて、その人が合う場所を見つけていく、そういうことになるかなと思いました。

あと、私、委員の話を聞いたときに、環境を設定していくといったときには、今の特別支援教育で考えられてる I C F の考え方が出てきました。 I C F の考え方は、前々期の社会教育委員会の中で話が出てきたものですが、今の特別支援教育は、その子の持ち味をいかに伸ばしていくかに主眼が置かれてる。従来の考え方だと、ここまでできないものを、これから社会に合わせて、世の中に出て困らないように、できないものでもここまで頑張れ、そっちに主眼が置かれてたけど。そうではなくて、その人が持てるものを思う存分發揮できる社会。それは環境がつくるというわけです。

自動販売機の事例がそうなんです。自動販売機は上の段の飲物を買うときに、そこにしか押すところがないと、立てる人しか押せないけど、発想を変えて下にボタンがあれば、お金入れるところも考えてみれば、縦にお金を入れる。ジャラジャラと入れるようになっていれば、すぐ買えるわけです。だから、その人が自動販売機で買える人になるための設定をこっちが変えれば、別に誰もが買えるようになる。

私、環境設定すると言ったときに、委員の話もそうだって、「支えてくれるよね」と言うんじやなくて、「楽しかったよね、また参加してね」と言う中で、委員が言ってくれたような、「ねえねえ、聞いてるだけじゃなくて、知ってるじやん」って、私も娘の話を聞いてると、本当によく知ってますから教わることばかり。「教えてよ。これ、ちょっとおばさんたち、分かんないから教えて」という感じです。もし教えてくれれば、「広げてくれてありがとう」って、「また来てね」みたいな。そういう中で支える人になってもらえるのかなと思うんです。

だから、決めてしまったことで何かを進めていくのではなくて、そういう意味での環境づくりというかな、物すごくアバウトな話として、申し訳ありません。そういうものを提言できたらいいなど、今日、皆さんの意見を聞いてて、思ったんです。

○委員

酒の場じゃなくても、マルシェでも何でも、そういう場ってあるなど。

○委員長

何げなくしゃべれる場所、自分のことが言いやすい場所ですよね。ぽろっと言える場所かな、ありがとうございます。

そのほか、いかがでしょうか。一応、これから審議していくにあたり、この5つのポイントで考えているんですが、これとこれはすごく重点的に考えようよとか、これがキーワードになるのではないかということについて、御意見があつたら伺いたいです。

加えるというのは、あまりなかつたかなと思ったんです。見える化は大事と、副委員長がおっしゃってくださいました。委員が、企業とのつながり方が重要だとおっしゃってくださいました。教育長からは（3）、従来のものに当てはまる人を探すんじゃなくて、これからのこと、ニーズとかつながるという意味での人材発掘、そういうことを御意見いただけたかと思うんですが、そういう受け止めでいいでしょうか。

○教育長

社会とつながる、つながりたい、つながる必要があるよという気持ちは、多くの人は持っているんですよね。

先日、不登校の支援を長年（20年ほど）やっている方（NPOの代表であり、学校の先生でもあり、ご自身のお子さん二人が不登校経験者）の話をオンラインで聞いたんです。いろんな事例も含めてお話を伺った中で、どの子も「つながりたい」と考えている。そのつながり方は様々ですが、例えばある子はメダカに運命を感じたようで、「これだ」と言って、家に水槽をいっぱい置き、ホームセンターで道具を買ってきて、うまくメダカをすくう道具を作ったりしていました。それも1つのつながり方です。不登校のこどもたちは、現象だけ見ると「社会とつながりがなかなかできない」と見えますが、内面には非常につながりたいと思っている。大人だってそうで、面倒くさいとか、行かなくてもいいかと思ったりもするけれど、行ってみると楽しいですよね。

今、「少子化が進み、社会がどんどん小さくなっていく」と言われていますが、私は人の頭数で物事を議論しているように思えてなりません。しかし、その中であっても、つながりができるによって、その人の生きざまはうんと変わってきます。今、静岡県がよく使っているキャッチコピーで言えば「ウェルビーイング」です。つながることでその人の自己効力感が高まったり、いろんなサポートを得られたりするわけです。

こういう「つながり」のチャンネルを何をもってつくるかというときに、社会教育が重要です。つながって、何か自分なりに面白いことがあったり、得ることがあったり、場合によってはときめきがあったりする。そういう意味で、社会教育というチャンネルは、今もこれからも重要なチャンネルになっていくだろうと思っています。

なのに、旧来型の枠組みを堅持するために活動していて、「人が来ない」「担い手が年を取った」と嘆き節を言っているだけだったら、何も変わらない。さっき言ったように、そのままだったらなくなっていくでしょう。私たちは今、そうではない新しい社会教育を構想する時期ではないかと思い、今日お話をさせていただきました。

そのときにもう一つのポイントは、今いる社会教育に携わる人がスーパーマンみたいに全部やるなんて無理だということです。それぞれのニーズを持っている人たちが、近くにいる人たちとつながるといい。それとて直接は無理だから、その媒介となるのは、さっきの言葉で言うと「ゲートキーパー」となるような、いろんな機関とうまくつながっていくといい。そして、そのゲートキーパーを自分で開拓しなくていいんです。そんなことは行政に聞けばいい。行政のほうで調べれば済む話です。

場合によっては、例えばうちの社会教育課が県の国際交流協会に連絡を入れて、「○○の社会教育担当者が連絡するのでお願いします」と繋いでおく。それは行政ができることです。そこから先是、ぜひ皆さん、「来るところに面白いことがあるんだよ」とアピールすることで、新しい仲間を開拓したらどうかなと思って聞いておりました。

○委員

審議の柱、5つですけど、今日の議論を聞いてても、(1)、(2)、(3)について、割と一体化した意見をいただいたりしていました。そのことをちょっと鑑みて、5つ、ちょっと多いなというのと、3つぐらいにならないのかなと思っていたときに、私の中で先ほど見える化と言ったんですけど、委員からあったように、活動を全部透明化するという意味ではなく、まず、そもそも新しい社会教育の人材像をみんなで共有しましょうという意味の見える化です。

ですので、(1)、(2)、(3)、割と今、地域の中で社会教育を担ってらっしゃる方、あるいは今、全く関係ないと思ってる方も、社会教育に関わる人材像ってこうなんじやないですか、あなたも参考できる場所なんですよと全体で共有するための方策が、多分、(1)、(2)、(3) が一体化してゐるのかなと思いました。企業との連携が並列かどうか分からないですけど。

5つ目がプラットフォーム云々書いてありますけど、今日、何度か出てくる、委員からもともと環境の設定とありましたけど、人とか情報とか活動とか、そういうものがどうつながるとか、仕掛けとか仕組みとか、何かきっかけとか、それの方策が多分5つ目のあたりで1つになるかなと思う。まとめると、新しい人材像をみんなで共有するための方策と、1つは企業との連携をキーにしていきながら、よりつながっていくための方策。もう一つは、人とか情報とか活動がどうつながるか、仕組みとか仕掛けの方策みたいなものに、私の中ではちょっと無理やりですけど、(1)、(2)、(3) を1つに一体化できないかなと感じました。

委員長

今の委員の案、どうですか。(1)、(2)、(3) をまとめた形で、人材像を共有するための方策。企業は特出して、そこの連携強化の方策。3番目は、皆さんのお話にもあったような、どういう情報、どういう人、つながる仕組みやきっかけ、仕掛けづくり、場づくりの方策という視点で考えていったらいいんじゃないかという御提案ですが。

私も(1)から(3)は、聞いてるとつながってるなど。教育長さんが従来の枠を超えて、新しい人材というか、有り様を提案していくといったときに、1人の人がよくよく考えると、こういう3つの人材、「3人で本当は分けていいようなことをやってませんか」とか、「こういうふうに考えたらどうですか、もっと声かけられますよ。」、「スーパーマンみたいな人だけが社会教育やるわけじゃないです。それぞれの持ち味で集まってくれませんか」みたいな、そういうことが(1)、(2)、(3)で言えるのかなと。まとまっていれば、逆に考えが言いやすいのかなということもあります。審議した結果、(1)、(2)、(3)をつなげて、こういうことを提案しようということにもなってくるのかなという感じもしました。

いかがでしょうか。企業を特出していくことにもなりますが、まだ調査結果から、やっぱり連携先に企業が、なかなか行政も苦手ですもんね。特定の企業と言うと、何かあるんじゃないかなみたいな話にもなりかねないんだけど。

委員が言うように、企業からなかなか言えない部分もあるわけです。だけど、飲み屋だったら、ちょっと知り合いになったなら言ってみるみたいなこともあるし。

○委員

企業の中でもB to Bの企業は、これだけものづくりの技術があるのに、なかなか若い人が来てくれるところもあるので、機会さえあれば、そうやってアピールできると思うので。しかも、現役の技術者が科学技術の入り口まで連れていてくれるので、こどもだけでなく、大人も魅力的。それは地域の誇りにつながる、こんなにすごい企業があるんだ、こんなすごい人たちが近くにいるんだと、そういうところで社会教育の枠が広がって、深さが出てくる。そんなように思うので、企業を巻き込むのは、出口戦略じやないけど、突破口になるんじゃないのかなと私は思います。

○教育長

今の委員のお話を聞くと、全くそのとおりだと思います。

先程の枠組みで話をすると、個々の企業と社会教育の担い手の間のつながり、ゲートキーパーは誰なんだろう。1つは商工会議所。商工会議所の方々は様々な企業を知ってるし、商工会議所のメンバー自体が企業から派遣された人々です。それから、地元の信用金庫さん。もちろん銀行、静岡県内には3つの銀行がありますけど、信用金庫さんもかなり企業の情報をお持ちですので、商工会議所、信用金庫あたりが、企業とつながるときのゲートキーパーになり得るのかなと思って聞いてました。

○委員長

地方の、静岡県のまちに人が少なくなると、そこにある産業が持続できなくなり、お互いに悲しいことです。地域の産業を盛り上げることは、まさにWIN-WINというか、私たちの生活を豊かにするためには非常に重要なことになります。

昨日テレビで、某電動自転車を世界で初めて作ったのが森町だと知りました。それをアピールするセレモニーをしており、遠州の小京都である森町をレンタサイクルで回れるというのです。公共交通機関が少ない地域で電動自転車を用いるという形で、こういう手もあるのだと思って見ていました。まちの自慢が一つ増えるわけです。委員のお話を聞いて、そう思いました。

ああいうところに社会教育が絡んでいけたらいい。例えば、レンタサイクルを使って森町を知る企画を立てて、みんなでやってみよう、とか。逆に、電動自転車をどうやって作るのか教えてもらおう、それで企業の応援団になってこようとか。そういうふうになっていってもいいのではないかと思いました。

そのほかは、いかがでしょうか。

そうしましたら、委員からのご提案に基づき、今後の審議の進め方をご提案します。 (1)

(2) (3) をまとめて「人材像共有の方策」を検討し、(4) を新たな (2) として「企業との連携強化の方策」、(5) を新たな (3) として「人、情報、様々つながる仕組みやきっかけ、その仕掛けの方策」として、今後検討していけたらと思うのですが、よろしいでしょうか。

実は、私がこの提案に賛同した理由は、資料1のスケジュールにあります。今後の審議の柱及びスケジュールについて、今日で第6回まで来ています。この後、来年まであと6回ありますが、報告書を作成するスケジュールから考えると、あと3回は十分に審議の時間を取ることができます。今日、この3本で審議を進めるということになれば、12月、2月、4月でそれぞれ一つずつ集中的に審議ができるのでよいと考えた次第です。

委員、ありがとうございます。そのように今後スケジュールを決め、来年には提案ができるようしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

では、ご賛同いただけたということで、審議のほうを、少々早めですが、終わりにさせていただきたいと思います。

最後に、今日の審議を通して、教育長から総括のコメントをいただけたらと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

○教育長

どうしてもこういう協議の場に来ると、頭が元の研究者モードになってしまうものですから。教育長としての立場を踏み越えた発言もあったかなと思います。しかし、私も今日、皆様の御発言を受けながら、非常に大きな刺激をいただきました。そして、これからの方針について、一定のビジョンを共有できたかなと思っております。

冒頭、かなりこれまでの議論とは違う論点が必要じゃないかと、いささか乱暴な問題提起をしたわけですけど、それも含めて、今日の議論が大きな転換点になって、この後の1年間、走り抜けていけるような、3つに絞ることで、私なりに展望も持てましたので、この後の皆様の御議論に深く期待をして、今度の報告書、楽しみにしております。どうぞよろしくお願ひします。

○委員長

今回私たちの議論の様子を見ていただき、研究者の目線のコメントまでいただけたことは、本当に大変勉強になりましたし、私たちも今の社会教育の現状、何とか変えていきたいという思いでお

りますので、励ましをいただけたと思っております。十分、諮問題に応えられるような形の報告書をまとめていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願ひいたします。

それでは、以上で本日の審議は終わらせていただきたいと思います。皆さんからは、本当に忌憚ない御意見を様々いただきまして、ありがとうございます。次回からも3本の柱の審議を進めていきますので、どうぞ御協力のほど、よろしくお願ひいたします。

それでは、これで本日の協議は終了します。事務局から連絡事項をお願いします。

○事務局

前半のこれまでの審議を通して、調査の組み立てや分析を行ってまいりましたが、本日の議論を通して新しい方向性が見えてきたことで、これまでの審議が確実につながったことを感じ、事務局としても大変うれしく思っております。

本委員会の会議録につきましては、3週間後を目安にメールにて皆様にお送りいたしますので、ご自身の発言の部分をご確認いただきますようお願ひいたします。

次回の第7回ですが、12月25日、午後2時からに決定いたしました。会場は別館9階の、本日の隣の第二会議室となります。どうぞよろしくお願ひいたします。

そのほか、ご不明な点等ございましたら、いつでも事務局までご連絡ください。

○委員長

それでは、以上をもちまして第6回静岡県社会教育委員会を閉会いたします。本日はありがとうございました。